通巻 41 号　December,2013

日本通信教育学会報

Japan Association of Distance Education

目　次

・第 61 回研究協議会を終えて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
・平成 25（2013）年度『研究論集』投稿募集・・・・・・・・・ 2
・「通信教育制度研究会」のご案内・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
・平成 25（2013）年度第 2 回理事会報告・・・・・・・・・・・・・ 3
・会員の声・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
・会員（入会・退会）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
・通信教育の動向・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
・通信教育のこの 1 冊・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

第 61 回研究協議会を終えて

日本通信教育学会第 61 回研究協議会が、桜美林大学四谷キャンパス地下ホールにて 2013 年 11 月 16 日（土）に開催されました。参加人数は、会員 34 名一般 12 名の計 46 名と昨年に比べ会員の参加数が大幅に増加いたしました（昨年は、会員 19 名一般 20 名の計 39 名でした）。今年は、昨年の研究協議会以降に新規入会された会員の参加も多く、本学会の新しい潮流が感じられる有意義な協議会が開催できたのではないかと思います。当日は、研究発表が 5 本に加え、講演やパネルディスカッションも行われ、通信制高校から通信制短大、通信制大学、通信制大学院まで幅広い分野の発表、議論が活発に展開されました。来年は更に多くの皆さまにご参加いただき、また研究発表分野の幅も広げ、更に大きな研究協議会の開催を計画しておりますので、会員の皆さまには研究発表への応募を期待すると共に、講演やシンポジウムの企画提案など、研究協議会へのご意見ご要望もお聞かせ願えればと思います。

それでは、研究発表や講演、パネルディスカッションなどについて、ご報告いたします。

白石会長による開会挨拶の後、午前は、2 本の研究発表が行われました。1 本目の特別研究発表では、東京学芸大学大学院の土岐会員による発表の後、指定討論者の神奈川県立大和西高等学校の手島会員と討議が行われました。会場との質疑応答も活発に行われ、予定時間の 80 分では足りないほどの発表でした。2 本目は、名古屋大学大学院の内田会員による研究発表と質疑応答が行われました。こちらも活発な討議が行われ、30 分という時間設定では短すぎるという今後の課題も明らかになりました。

昼食・休憩を挟み、午後は、3 本の研究発表が行われました。この日 3 本目は、星槎国際高等学校の藤本会員による研究発表、4 本目は、愛知県立旭陵高等学校の石川会員による研究発表が行われました。ここまで午前から続いた 4 本の研究発表はいずれも通信制高校に関するもので、昨今の通信制高校への関心の高まりが感じられる発表でした。5 本目となる最後の研究発表は佛教大学の篠原会員によるもので、通信制大学の休学者を含む学生調査から「リポート未提出者は休学者の予備軍になっているとも考えられる」という重要な結果が発表されました。

5 本の研究発表後は、看護学の博士で看護師・随筆家である宮子あずさ氏の講演が行われました。通信制短大から通信制大学、通信制大学院までのご自身の体験について笑いを交えながら楽しくお話しいただき、あっという間の 1 時間でした。講演の中で紹介された博士論文のテーマにサルトル哲学を選んだ理由には、会場から多くの関心が寄せられましたので、発表資料から一部を転記し報告いたします。「くだいて言えば、私はだれも恨むことはない、ということだ。私の身に起こることはすべて私によって私の身に起こるのであり、それがどんなに厭わしいものであってもすべて私のものなのである。むろん私がこの家庭、この社会、この世界にこのような者として生まれてきたこと、これは私の責任ではない。しかし生きている以上、私がこのような者として生まれてきたことをどう考えるか、これは私の責任である」（矢内原伊作(1967)：サルトル―実存主義の根本思想,中央公論新社（中公新書 124）,東京.）

最後は、通信制大学院を修了した社会人によるパネルディスカッションが行われました。「社会人の学びの場としての通信制大学院を考える」というテーマで行われ、これまでの統計的なデータからは見えてこなかった通信制大学院の実態を探るという趣旨に沿った活発な議論が行われました。パネリストは、武蔵野大学大学院通信教育部人間学研究科人間学専攻修了の稲垣諭会員、京都産業大学大学院経済学研究科（通信教育課程）修了の木村知洋会員、京都造形芸術大学大学院芸術研究科（通信教育）芸術環境専攻修了の藤江慶一郎会員の 3 名で、いずれも企業に勤めながらの修了であり、社会人が大学院で学ぶことの意義などが議論されました。次なる通信制大学院に所属しているパネリストもいるなど現在進行形で「社会人の学びの場としての通信制大学院」が語られたのではないでしょうか。ディスカッションでは、「学習計画の立て方」「修士論文執筆のための教員とのコンタク

ト方法」「通信制と通学制の似ているところ、違うところ」「修了したことでのキャリア変化」「博士課程には進学するのか」といったことが活発に議論されました。

研究協議会終了後は、会場を移して情報交換会が開催され、27名が参加されました。参加者の内26名が会員であり、大変有意義な情報交換が行われたと思います。特に、複数名の会員による共同研究プロジェクト企画が発足するなど、研究活動に直結した情報交換会だったのではないでしょうか。また、新規入会会員の自己紹介では自身の研究分野のことだけでなく、通信教育との出会いなどが発言され、ユニークな人柄を垣間見ることもできました。寺下会員の挨拶では、諸外国に比べて日本の社会人大学院入学者が増えていない現状への憂慮と、そのために本学会が果たす役割について発言があり、来年の研究協議会に向けて新たなスタートを切るよいテーマをいただけたと思います。

最後に、数ヵ月に渡る研究協議会の準備や当日の会場運営に早朝から協力いただいた石原会員、小暮会員、田島会員、寺下会員、山鹿会員に感謝を申し上げて第61回研究協議会の報告といたします。

（事務局幹事　小林建太郎）

平成25（2013）年度『研究論集』投稿募集

下記の通り、平成25（2013）年度『研究論集』への投稿を募集します。奮ってご応募ください。

（１）論文

①題目届の提出

・提出方法：投稿を希望する会員は、期日までに題目等（①氏名、②所属、③題目）を事務局宛に電子メール（jade.office.obirin@gmail.com）にてお知らせください。

・提出締切：平成25（2013）年12月20日（金）

②原稿の提出

・提出方法：期日までに原稿（MS-WORD）を事務局宛に電子メール（jade.office.obirin@gmail.com）にて提出して下さい。

・提出締切：平成26（2014）年2月28日（金）

③刊行日（予定）

・平成26（2014）年6月30日（月）

④投稿規定・査読基準

・『平成24年度 研究論集』巻末、『日本通信教育学会報』通巻40号2頁、または日本通信教育学会Webサイト（http://jade.r-cms.biz/）をご参照ください。

（２）書評・図書紹介

①「書評・図書紹介」で取り上げる図書

・通信教育、遠隔教育などに関する内容を含み、かつ原則として刊行から3年以内（2011年1月以降）のもの。

②分量

・「書評」が4,000～6,000字程度、「図書紹介」が2,000～4,000字程度

③投稿希望の提出

・提出方法：投稿を希望する会員は、期日までに、①氏名、②所属、③取り上げる図書の著者名・書名・出版社名・刊行年を事務局宛に電子メール（jade.office.obirin@gmail.com）にてお知らせください。

・提出締切：平成25（2013）年12月20日（金）

④原稿の提出

・提出方法：原稿はMS-Wordで作成し、電子メールに添付して事務局宛（jade.office.obirin@gmail.com）にお送りください。

・提出締切：平成26（2014）年2月28日（金）

⑤その他

・「論文」と「書評・図書紹介」との同時投稿を認めます。

・必要に応じて査読委員会で採否を審査し、修正を求める場合があります。

「通信教育制度研究会」のご案内

下記の通り、「通信教育制度研究会」（代表：鈴木克夫）が開催されます。日本通信教育学会は、この研究会に協賛しています。参加を希望する会員は、下記の事務局までお申し込み下さい（学会事務局とは異なりますのでご注意ください）。

【第14回】

日　　時：2013年12月21日（土）14：00～17：00　※終了後に懇親会を予定
会　　場：桜美林大学 四谷キャンパス Y405教室
テ ー マ：通信教育はなぜ低く見られるのか―差別の心理を考える―
発 表 者：鈴木 克夫（桜美林大学）

【第 15 回】
日　　時：2014 年 2 月 8 日（土）14：00～17：00　※終了後に懇親会を予定
会　　場：金沢星稜大学
テ ー マ：MOOC について考える―通信教育の立場から―
発 表 者：小林建太郎（デジタル・ナレッジ）、辰島裕美（北陸学院大学）、鈴木克夫（桜美林大学）
【第 16 回】
日　　時：2014 年 3 月 15 日（土）14：00～17：00　※終了後に懇親会を予定
会　　場：桜美林大学 四谷キャンパス
テ ー マ：来年度からの活動について―共同研究に向けての提案―（仮）
発 表 者：鈴木 克夫（桜美林大学）

参加資格：会員でない方も参加できます。
参 加 費：無料（懇親会費は別途）
申込方法：日本通信教育学会の Web サイト（http://jade.r-cms.biz/）にアクセスし、参加申込フォームへ必要事項をご記入の上、サイトからお申し込み下さい。
申込締切：開催日の前々日
問 合 せ：通信教育制度研究会事務局 小林建太郎（デジタル・ナレッジ）kobayashi@digital-knowledge.co.jp

平成 25（2013）年度第 2 回理事会報告

平成 25（2013）年度第 2 回日本通信教育学会理事会が、平成 25（2013）年 9 月 6 日（金）16 時から 18 時に桜美林大学四谷キャンパスで開催され、以下の事項が審議、報告された。

【審議事項】

（１）第 61 回研究協議会のプログラム（案）について：事務局より、第 61 回研究協議会のプログラム（案）について資料に基づいて説明があり、原案の通り承認された。

（２）若手研究者交流会（仮称）について：事務局より、前回理事会で提案された「若手研究者交流会」（仮称）について資料に基づいて説明があった。すでに複数の若手会員の賛同を得るとともに、当該会員が今夏開催した研究会に学会の後援名義の使用を許可したこと（理事会承認済み）、ただし、研究協議会前日の開催については日程の関係で見送ることなどが報告された。今後、学会 Web サイトでの広報や財政的支援を行う方向で検討することが承認された。

（３）平成 25（2013）年度『研究論集』の企画（案）について：事務局より、平成 25（2013）年度『研究論集』の企画（案）について資料に基づいて説明があった。「特集」に関しては第 61 回研究協議会における講演およびパネルディスカッションの総括報告を掲載すること、「書評・図書紹介」に関しては論文投稿のスケジュールに合わせて、会員から募集（修正を求めることがあることを明記する）することが承認された。

（４）『日本通信教育学会報』通巻 41・42 号の企画（案）について：事務局より、『日本通信教育学会報』通巻 41・42 号の企画（案）について資料に基づいて説明があり、原案の通り承認された。なお、通巻 41 号の「通信教育のこの 1 冊」に関しては、手島純著『これが通信制高校だ』（平成 14 年、北斗出版）を取り上げ、通信制高校について研究している会員に執筆を依頼することが了承された。

（５）会員資格と入会申込方法について：事務局より、会員資格と入会申込方法について資料に基づいて説明があり、協議した結果、今後、会員資格（入会資格）として会員（1 名または 1 団体）の紹介を必要とすること、ただし、紹介する会員が見つからない場合、入会申込書の他に、入会の動機・目的、職業・経歴、研究テーマ等を詳しく記載した別紙（書式自由）の提出を求め、理事会（メールによらず、年 3 回開催の理事会）にて入会の諾否を審査することが承認された。

【報告事項】

（１）会員の状況および会費の入金状況について：事務局より、会員数（平成 25（2013）年 9 月 2 日現在）ならびに会員の異動（平成 23～25 年度）について資料に基づいて報告があった。

（２）「通信教育制度研究会」の開催状況および今後の計画について：事務局より、学会が後援する「通信教育制度研究会」の開催状況および今後の計画について資料に基づいて報告があった。なお、当研究会代表の鈴木事務局長より、次年度以降、テーマおよび参加方式について見直す方向で検討しているとの発言があった。

（３）学会後援によるイベントの開催について：事務局より、学会後援のイベント（「私立通信制高校のリアル」平成 25 年 8 月 7 日開催）について報告があった。

（４）e-Learning Awards 2013 への協賛について：事務局より、昨年度に続き、e-Learning Awards（主催：e ラーニングアワードフォーラム実行委員会／フジサンケイビジネスアイ）に協賛したことの報告があった。

（５）Web サイトの運用状況について：事務局より、学会 Web サイトの運用状況について、2 週間に 1 回程度の更新を行い、会報に掲載された「通信教育のこの 1 冊」および「会員の声」などの情報を転載しているとの報告があった。また、通信教育 4 団体からの要望があれば、適宜、その活動計画等を掲載することが了承された。

会 員 の 声

研究課題：通信制高校における教育保障

ここ数年通信制の研究が盛んになってきたことに驚きとともに喜びを感じます。研究対象としても未開拓な部分も多く、特に近年の変化は目覚ましいにもかかわらず、その研究は緒についていないと言えます。通信制教育というと教育界では傍系に位置づけられ、主流にはなりにくい分野であることもその一因と言えるでしょう。

通信教育は教育保障という意味では極めて重要な意味を持つ制度だということが言えます。教育の均等を実現するうえで通信制の持つ役割は大きなものがあると言えるでしょう。

私の研究は、通信制高等学校での生徒の教育保障ということにあります。近年の生徒の質の変化に対応する通信制高校では、多様性に応える教育体制が必要です。高校に入学してくる生徒はニーズもモチベーションもバックボーンも様々です。こうした生徒への指導をいかに高め、学習の質を保証しながら、教育基本法に謳われている人格の完成を目指した教育を行うことができるか、通信制の制度・カリキュラム、臨床的指導を考察していくことを目的しています。

通信制高校が高校教育のセイフティーネットと呼ばれるようになって久しいですが、通信制高校教育は最後の砦ではなく、全日制、定時制と並ぶ第三の選択肢としてあるというのが正確な認識です。教育の機会均等のもとに教育の質的保証を確実なものにすることで通信制高校は充実した役割を果たすことができます。しかし、残念ながら現在は制度的な壁や経済的な問題により生徒のニーズに応えることが十分にできません。

通信制高校は可能性をもった教育の場です。教育の本質を目指した豊かで充実した教育を行うことがなされるように、現実に即したきめ細かな教育指導が果たされるように教育の整備が進められるべきものでしょう。

早稲田大学非常勤講師　上野 昌之

研究協議会に初めて参加して

職場の同僚のＩさんから「日本通信教育学会」を紹介され、ＨＰで見た第61回研究協議会の内容に惹かれ、入会するとともに研究協議会に初参加させてもらい、貴重な時間を過ごすことができたことを感謝しています。

最初のＴさんの発表を聞いて、正直、若いのに「通信制高校のことを良く理解されてみえるなと」感心しました。Ｔさんをはじめ、ＵさんやＦさんら若い方々の発表を聞かせてもらい、彼ら彼女たちから「気」みたいなものを感じとることができたことも良かったなと思います。また、以前、愛知でやっている研究会に京都から来ていただいて報告してもらったＡさんに久しぶりに会えたりもしました。

皆さんと昼食を一緒にとる中で、若い方々から、通信制高校やサポート校に関心を持った経緯を聞くことができました。連絡先も交換しましたので、冬季休業中の研修として発表要旨集録をじっくり読ましてもらい、感想・質問などをさせていただけたらと考えています。

帰りは、もう一つの目的であった東京都美術館の『ターナー展』に行きました。『ターナー展』に行くのはたぶん大学生の時以来30年ぶりぐらいだと思います。夏目漱石の『坊ちゃん』にターナーの絵のことがでてくるので、再度見てみたかったのです。『坊ちゃん』は今回はじめて読みましたが、ＴＶドラマ『半沢直樹』を彷彿とさせるような坊ちゃんの言動や生徒の処分をめぐる職員会議の様子などが出てくるので興味深く読めました。

来年もまた、研究協議会に参加できることを楽しみにしています。

愛知県立旭陵高等学校　小久保 光浩

◆「会員の声」を募集◆

「会員の声」を本誌に掲載します。掲載を希望する会員は、原稿（600～750字程度、MS-Wordで作成）を事務局（jade.office.obirin@gmail.com）までお送りください。

会　　員

Webサイトでは省略します

通信教育の動向

全国高等学校通信制教育研究会

11 月 28 日（木）アルカディア市ヶ谷において全国通信制高等学校長会ブロック代表研究協議会が、文部科学省の髙見英樹専門官を招いて開催された。全国 7 ブロックの代表から各ブロックの活動状況の報告と情報交換の後、髙見専門官から「通信制高校をめぐる最近の動向」と題して、中央教育審議会高校教育部会における審議内容も含めながら講話を戴いた。講話を聞き、今後「教育の質」の担保が重要な課題の一つであると感じた。

11 月 29 日（金）午前、ＮＨＫ主催の「ＮＨＫ高校通信教育委員会」がＮＨＫ放送センターで開催された。この会は、来年度のＮＨＫテレビ・ラジオの高校講座についてＮＨＫから説明を聞くと共に、活用している通信制高校から意見・要望を伝え、番組向上に資するものである。

11 月 29 日（金）午後から、午前に引き続いてＮＨＫ放送センターで平成 25 年度全通研第 2 回理事会が開催された。森慎二会長の開会挨拶があり、6 月の福島大会以後の事業報告の後、協議題の審議に入った。

新学習指導要領完全実施に伴う第 4 次学習書作成科目では、「国語表現」、「倫理」、「政治・経済」に加えて「簿記」を作成することが確認された。また、全通研大会は、第 66 回大会は平成 26 年に東京都で、第 67 回大会は 27 年に石川県で、68 回大会は 28 年に和歌山県で開催することが確認された。

この後、7 つの各地区通研から事業報告がなされて滞りなく議事を終了した。

（事務局長　飯島　篤）

公益財団法人 私立大学通信教育協会

本協会は、現在、37 大学・18 大学院・9 短期大学の合計 64 校が加盟し、大学通信教育の周知普及と水準向上の事業を推進しています。

（１）大学通信教育の周知普及事業

大学通信教育の在り方を広く社会に伝え、入学希望者に情報を提供するために、本協会主催の事業として「平成 25 年秋期合同入学説明会」(8～9 月、全国 5 会場) を実施し、さらに 12 月 1 日には通信制大学院の合同入学説明会、来年 2 月には「平成 26 年春期合同入学説明会」（全国 10 会場、13 日程) を実施します。また、「シンガク情報フェスタ」（10 月）などにも参加しました。

（２）大学通信教育の水準向上事業

厚生労働省の担当課長補佐及び文部科学省の担当室長を講師に招き、「認定こども園法改正に伴う幼稚園教諭免許状及び保育士資格の取得の特例について」の説明と加盟教職員による意見情報交換会を開催し（７月)、10 月には京都にて「大学通信教育職員研修会」を 1 泊 2 日で実施して職員の能力向上に努め、京都市発達障害者支援センターから「発達障害とその対応について」の講演を行いました。また同月、大学通信教育における情報通信技術の活用に関する課題と展望についてシンポジウムを開催しました。

（理事長　髙橋陽一）

一般財団法人 社会通信教育協会

当協会は、文部科学省認定社会通信教育を実施しております学校法人、財団法人、社団法人の 20 団体で構成しております。協会を設立して、54 年目になります。

社会教育、生涯学習に関する調査研修をはじめ、文部科学省認定社会通信教育で学んだことを生かす制度として、生涯学習インストラクター制度、生涯学習コーディネーター制度を設置しております。その会員の方々は、全国で学校支援に地域活動に活躍をしております。

事業実施として、平成 26 年 2 月 22 日（土)には、第 13 回生涯学習インストラクター・生涯学習コーディネーター全国大会・交流懇親会を、東京・代々木国立オリンピック青少年総合センターで開催予定です。

なお、平成 26 年 4 月 25 日（金）には、文部科学省認定社会通信教育講座で修了した優秀者の第 65 回文部科学大臣表彰式・祝賀会を文部科学省 講堂で文部科学大臣ご臨席のもと挙行されます。

（事務局長　鈴木久善）

公益社団法人 日本通信教育振興協会

◎文部科学大臣賞 14 名を表彰！

去る 11 月 30 日（土)、東京都千代田区の主婦会館にて、当協会主催の生涯学習奨励賞表彰式を挙行いたしました。この表彰は、当協会が認定する通信教育講座「生涯学習奨励講座」を特に優秀な成績で修了した方を対象に、文部科学大臣賞並びに当協会会長賞を授与するものです。平成元年に第一回表彰式を行って以来、今年は 25 回目となります。今年度は文部科学大臣賞 14 名、当協会会長賞 36 名、総勢 50 名の方々が栄えある賞を手にされました。

◎学習指導員の登録が 1500 名を達成！

地域での生涯学習の支援者として当協会が認定する学習指導員の登録者が延べで 1515 名になりました。認定開始以来 8 年ほどになりますが、登録者の多くは、専門的通信教育や社会での実務経験によって培った自身の専門的知識や技術を、学びたいと願う多くの方々の要望に応え、生涯学習センターや公民館での講師の任についたり、またボランティアで小・中学校での課外事業の世話人になったり、さまざまな年代の学習支援者として全国各地で活動中です。

（事務局）

通信教育のこの１冊

手島　純著『これが通信制高校だ』

（2002 年 北斗出版）

著者の手島氏は、高校教諭として、15 年間公立の通信制高校に勤務した経験を持ち、現在も通信制高校に関する研究や発言を続けられている。

本書は「これが通信制高校だ」というタイトルだが、内容は日本の通信制高校にとどまらず、ドイツやアメリカにおける通信教育や、遠隔教育の現状にまで及んでいる。また、日本の通信制高校についても、設置経緯から現在の多様な高校の実態に至るまで、文献調査や著者の教員としての経験、高校への訪問調査によって詳細に述べられている。そして最後には、教育の在り方そのものに対する提言がなされている。現在、通信制高校に関連する書籍の多くは学校案内で、通信制高校に関しての研究はまだまだ少ない。そのため、特色ある学校の様子を知る事はできても、ベースとなる制度的背景や、通信制高校の生徒の多様化による問題が指摘されることは少ない。こうした中で、本書は通信制高校の在り方、学校教育の在り方にまで踏み込んだ貴重な一冊である。

さて、戦後、意欲があってもなお受けることが難しかった高校教育をより多くの人々に開放するため、通信制課程が設置された。通信制高校発足当時に想定されていた入学者は、成人や勤労少年であった。しかし、中学校等卒業生の 98%が進学する現在、通信制高校の生徒は勤労成人者と若年無業者とに二極化しているという。

高校通信制課程は、他の課程とは異なり、各自が自身の都合に合わせた時間と場所において取り組む添削課題が学習の中心に据えられている。そのため、生徒が登校して対面による指導を受けるべき時間数は、他の課程と比べると非常に少ない。そのため通信制高校では、生徒は各自のペースに合わせて学習に取り組むことができる。また、生徒の登校日数が少ない通信制高校では、いじめが起きづらく、不登校は成立しない。こうした特徴から、多様なニーズを受けとめているのが現在の通信制高校である。しかし、生徒の学力や学習意欲にもばらつきが大きく、自律的な学習を前提としていた通信制高校において行われる教育の在り方も改めて問われるようになっている。

在籍生徒の入学経緯や目的が多様である以上、彼らが求める教育の在り方も異なっている。当然、一つの学校ですべてのニーズに応えることはできないため、私立の通信制高校は、それぞれに特色を打ち出し、更に個別支援を充実させることで、多様なニーズに対応している。通信制高校における教育は通信教育に限らない。すべての通信制高校では、学習指導要領によって定められたスクーリングが実施されている。しかし近年では、通信制高校における学習をサポートする「サポート校」や高校自体への登校日数を増やした「通学型通信制高校」などが登場している。スクーリングの実施方法や制服の有無、生徒指導の内容、設定された登校日数の多寡など、近年では、通信制高校が、「近代学校」的な学校を求める若者のニーズまで満たすようになっているのである。このような状況をどう捉えるべきか。

私立を中心に通信制高校が増加を続ける中で、通信制高校とは何かということを問うことは、本書が出版された当時以上に重要になっている。通信制高校が、通信による高校教育をより充実させるためにも、より手厚い支援を必要としている生徒のための学校が、「通信制」制度の柔軟さを利用するのではなく、より生徒のニーズに適した教育を行うためにも、高校教育制度が見直されるべき時期に来ているといえるだろう。

本書の最終章は、学校教育の在り方の検討に割かれ、「学校」や「教育」そのものに対する問題提起がなされている。果たして高校教育とは、学校教育とは、何を目指し、どのように行われるべきものなのか。通信制高校における多様な教育の在り方を前にすると、こうした問いに直面せざるを得ないが、著者は最後に、通信制高校の今日的意義について次のように述べている。

> 通信制高校のようにいわゆる近代学校的ではない教育方法をとる学校へと、近年、若年層が増えていく傾向は、通信制の中に既存の学校への違和感を超えるものを彼らが見出していることの証左ではないでしょうか。(中略)通信制高校の今日的意義とは、通信制高校に限定されたものではなく、教育一般へと広げて考えることのできる質を含んでいると私は思います。(p.170)

通信制高校の在り方について考えようとすると、学校教育における「当たり前」を疑い、本来の学びの在り方にまで目を向けることになる。裏を返せば、教育の目的やその意義について考える時、通信制高校を参考にしない手はないのである。

（土岐玲奈　東京学芸大学大学院）

日本通信教育学会報　通巻 41 号

発行日　平成 25（2013）年 12 月 5 日
発行所　日本通信教育学会事務局
〒194-0294 東京都町田市常盤町 3758　崇貞館 B608　桜美林大学　鈴木克夫研究室内
日本通信教育学会事務局　E-mail：jade.office.obirin@gmail.com